

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

現代版!?「私の体は、私のもの」

2015年猛暑…「江古田ちゃん」がいない初めての夏…。2006年から8年半、ついに昨年10月に単行本が完結してしまい、未だ、「江古田ちゃんロス（略して、えこロス）」の私である。

作者のデビュー作であり、『月刊アフタヌーン』で連載されていた『臨死!! 江古田ちゃん』は、「愛と生活に追われる24歳」の江古田ちゃんを主人公とする4コママンガである。

江古田ちゃんは、練馬区江古田駅周辺の安アパートで全裸生活を送るフリーター女子。昼は、オペレーターの派遣社員、ティッシュ配りのバイト、ヌードモデル…。夜は、クラブのホステス、フィリピンパブ、SMショーパブなどなど、体を張って働きながら、つつましく暮らしている。親友とのドライで濃密な友情は変わらないが、セックスの相手は毎回違う。そんな彼女を周囲は「奔放」とみなすが、二股を続ける浮気男と別れられない「一途」な面も。そんな江古田ちゃんの日常、仕事、友情、セックスが描かれている。

本書が生まれたのは、ちょうど世間で「アラサー」や「肉食系女子」といった言葉が流行した時期である。2003年に酒井順子著『負け犬の遠吠え』が出版され、30代の未婚女子の自嘲的处世術が大きな社会的反響を呼んで数年後。「浮いた話の一つもない」ことを遠吠えてみせた『負け犬』に代わり、結婚と関係ない恋愛やセックスに積極的な肉食系女子の存在が目立つようになった。セックスに興味がある、やりたいという女子の欲望は、いまや「はしたない」ものとはみなされない。セクシーというのとも違う…ちょっと体育会系、ガテン系のイメージに近いような。「私、肉食系だから!」という自己アピールには、胃腸の丈夫さをウリにするようなヘルシーさが感じられる。



「臨死!! 江古田ちゃん」

瀧波ユカリ

講談社(1巻～8巻)

定価 524円+税 (1巻～3巻)

533円+税 (4巻・5巻)

543円+税 (6巻)

552円+税 (7巻～8巻)

一方、セックスに食欲な江古田ちゃんには、肉食系の響きにあるヘルシーさは皆無である。「また、つまらない男とやってしまった…」という虚無感や、「なんか、違うんだよな…」という不全感。無理して中身の無い会話を続けるくらいなら、セックスするほうが「よっぽどいい!」という割り切りや、恋愛が絡まなければ「何でも言えちゃう!」という開放感。暗がりのなか、寝ている男の隣でぼんやり考える江古田ちゃんが放つセリフは、毎回、バカバカしくて、イタくて、切なくて、そして深い。セックスは、胃腸でするものじゃない。だからこそ、いろいろ考えてしまうものなのだ。セックスをヘルシーに語るのもいいけれど、江古田ちゃんのように、「なんとなく、これじゃない感じ」「自分のダメな部分が見えちゃう感じ」をうっすら伴うのが、セックスのリアリティではないだろうか。

江古田ちゃんの間人観察も秀逸だ。例えば、異性のもとより、同性からもウケのよい「女らしい」女子を『猛禽（猛禽類のように狙った獲物は逃さない）』と呼び、忌み嫌いながらも、そのパーフェクトな対人スキルに脱帽せざるをえない江古田ちゃん。かつての「ブリッコ」は、進化を遂げているのである。飲み会で繰り広げられる男女のさまざまな「ジェンダー演技」をあからさまに指摘し、場の雰囲気をおち壊していく姿は、まさに“(空気を読まない) アクティビスト”といえよう。

社会が求める女ジェンダーを笑い飛ばし、セックスに突進していく江古田ちゃん。周囲から「自分を大切に」「安売りはよくない」と諭されても、「事実上失ったのは、『まともな女』って評価くらいだ」とまるで意に介さない。男に体を「征服」されそうになればなるほど、江古田ちゃん実感するのだ——「誰に何をされても、私の体は私のものなんだなあ」。

『臨死!! 江古田ちゃん』は、現代を読み解くジェンダー論であり、現代のフェミニズムなのである。

(大阪大学大学院准教授 野坂祐子)